

山口農試だより

グリーンウェーブ

8 号

平成10年9月
山口県農業試験場
山口市大内御堀1419
TEL (0839) 27-0211
FAX (0839) 27-0214

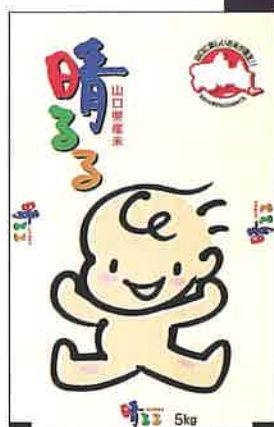
育てよう！ 水稻新品種「晴るる」

本県が育成した「山口1号」の名前は、県内外から公募した中から「晴るる」に決定しました。この名前は、「お日様を浴びてすくすくと育ったお米をイメージした」ものです。



「晴るる」の特徴

- ◆ 熟期は「コシヒカリ」と「ヤマホウシ」の中間。
- ◆ 稈長は80～85cmで両親より倒伏に強い。
- ◆ 茎数および穂数が確保しやすい。
- ◆ 収量が安定している。
- ◆ 玄米品質が良い。
- ◆ 食味は「ヤマホウシ」より優れる。
- ◆ 病害に対する抵抗性は概ね「ヤマホウシ」と同程度。



徳佐寒冷地分場
普通作物研究室
井上浩一郎

この「晴るる」は、中山間地域の複雑な地形に適する良食味品種の育成、特に「ヤマホウシ」の食味向上を主な目的に、平成2年に「ヤマホウシ」を母、「コシヒカリ」を父として徳佐寒冷地分場で交配し、翌年に雑種第一代の蒔（花粉の入った袋）を培養して育成した新品種です。

米の販売競争が激化している中で、この「晴るる」への期待は大きく、生産者の情報を消費者に公開し、ブランド米に成長するよう各方面で努力されています。この期待に応え、消費者および農家に親しまれる品種に育つよう願っています。

—西条柿の新たな害虫防除対策について—

～新害虫カキサビダニの被害防除対策～

西条柿は果実が汚れやすく、その大きな要因の一つがサビ障害です。

この溝部に発生するサビ障害が、新害虫カキサビダニの被害であることが最近明らかになりました。

そこで、その被害および発生生態の究明と防除対策への取り組み状況について紹介します。

▶▶▶▶ 主な症状 ◀◀◀◀



幼果の被害



ヘタ内部で果実を加害するカキサビダニ

カキサビダニは0.1mmと微小で、ヘタの中で加害するため気がつきにくく、被害が7月になって溝部を中心にヘタから黒色の障害として発生します。（写真左上）

その後、果実の肥大に伴って亀裂・コルク化して、収穫期には茶褐色のサビ症状となります（写真右下）。

被害の発生は品種により異なり、富有では少なく、西条柿では特異的に多く発生します。

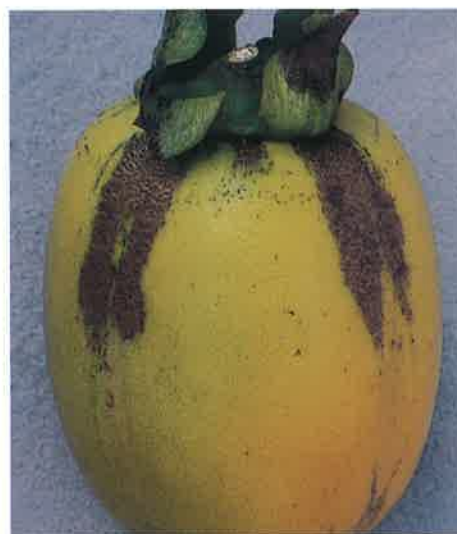
西条柿には溝があり、果皮が薄いことがその原因です。

カキサビダニは芽の中で越冬し、5月下旬頃から花、幼果に寄生し、ヘタの中で加害します（写真右上）。

防除は、5月上～中旬の展葉終止期の薬剤散布で被害が抑えられます。

カキサビダニにはピリダベン水和剤が登録されています。その他カキで使える多くの殺虫剤と殺菌剤で効果が認められ、他の病害虫の防除で併殺効果が期待できます。

今後は、カキサビダニの発生生態に基づいた総合的防除技術を検討します。



収穫期の被害



（萩柑きつ試験場 稗圃克己）

◆◆◆ 密封包装による鮮度保持技術 ◆◆◆ 届けます！いきいき「はなっこりー」

農業試験場で開発した「はなっこりー」は、サイシン（中国野菜）とブロッコリーから育成された蕾と花茎を食べる新しい野菜です。「はなっこりー」は、「茎がやわらかく甘みがある」、「緑色が鮮やか」、「子供が喜んで食べる」、「手軽に調理できる」等、消費者の評価も上々で、本格的な産地化が期待されています。しかし、収穫後も開花が進み、比較的早くしおれるので、流通販売段階での鮮度保持対策が求められていました。

そこで、農業試験場ではメーカーと共同で、ポリプロピレンを素材とした密封包装に適したフィルムを開発しました。密封包装をすることにより、しおれを防ぎ、フィルムのガス透過性により包装内の酸素や炭酸ガスを「はなっこりー」の鮮度保持に適した濃度に維持するものです。

このフィルムの利用により従来の2日間の日持ちが5日間に伸びて、畑でとれたそのままの姿の「はなっこりー」を消費者に届けることができます。

（農業試験場農産加工研究室）

開発フィルムによる鮮度保持効果



対照（ポリエチレン） 開発フィルム フィルムA フィルムB

水稻の種 もみって、どう やってつくって いるの？

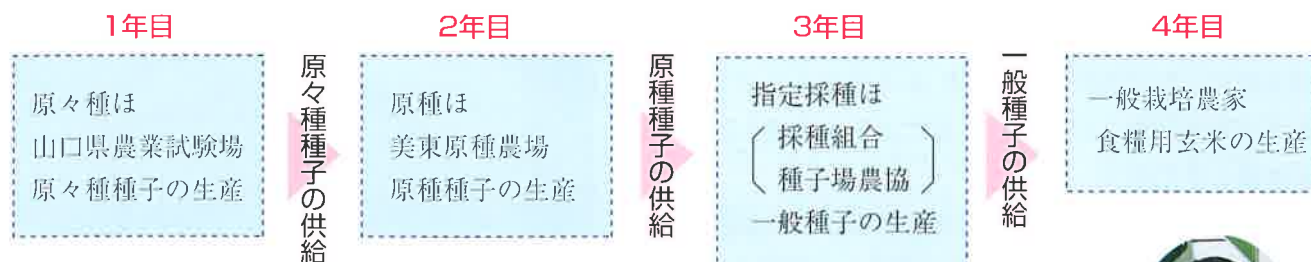
現在、山口県では水稻で10品種が奨励品種に採用されており、その種子は関係団体の協力をいただきながら県が責任を持って供給しています。具体的には優良な種子を図のように、原々種、原種、一般採種の3段階を3年かけて増殖し、4年目に農家にお届けしています。

種子の生産においては以下のことに特に注意しています。

① 他の品種の粳が絶対に混じらないよう、収穫や乾燥に使う機械や作業舎を品種ごとに念入りに掃除しています。

② ほ場では、草丈の長短や出穂期の早晩といった形質についてバラツキの大きい株を全て抜き取っています。また、そのような違いがよく確認できるようにほ場全体が均一に生育するように努めています。

③ 病虫害の防除を徹底しています。なかでも種子で伝染するばか苗病などの防除には、気をつけています。



美東原種農場では、今後とも発芽力の強い充実した原種を採種し、農家にお届けします。

（美東原種農場 福田裕行）



研究室・分場 紹介 北浦に根ざした栽培技術を目指して

萩柑きつ 試験場

萩柑きつ試験場は、北浦地域の8市町村と夏柑生産団体の強い要請によって昭和39年に、山口県農業試験場萩夏柑分場として創設されました。その後、中晩柑類における消費者ニーズの多様化などで、萩柑きつ試験場と改名し、研究対象も夏柑だけでなく、中晩柑類（甘夏、八朔、土佐ブタンなど）及び地域特産果樹（ユズなどの香酸柑きつ、西条柿など）へと広がってきました。

現在、中晩柑類については、北浦地方に適した優良系統の選定、小型スピードスプレーヤーの利用、緩効性肥料の利用による施肥回数の低減や簡易貯蔵などの省力化栽培技術の確立、ウイルス病対策、果皮の汚損病害防除、ミカンハダニの防除技術の確立について、また、特産果樹については、ユズの弱毒ウイルスの選抜、長門ユズキチの無核化や西条柿の優良系統の選抜を行ったほか、高品質安定生産技術の確立に取り組んでいます。

今後も生産現場と一層の連携をもって、“産地から頼りにされる柑きつ試験場”を目指して職員一同力を合わせて懸命に頑張ります。

（萩柑きつ試験場 福原 宏行）



むつみ村で 移動農業試験場 を開催

県農業試験場は、7月3日にむつみ村において中山間地域のメロン・トマト栽培農家を対象に移動農業試験場を開催し、約100名の参加を得ました。

この移動農業試験場は、県の試験研究成果や全国の情報を変えて地域に提供し、課題解決に役立つように平成6年度から実施しているものです。

はじめに、むつみ村吉部の山本 正さんのメロンハウスで、県農試が現地試験を行っている臭化メチル代替え技術の情報を提供しました。

その後、むつみ村役場の会場でも、メロンの高品質栽培に向けての技術情報やトマトの整枝法、天敵フェロモンを利用した防除技術などの話題提供を行いました。

農業試験場では今後ともテーマを定め、各地で開催することとしています。

